慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マルクス主義とポーランド問題 : マルクス「ポーランド問題にかんする手稿」を中心として
Sub Title	Marxism and the Polish problem : Karl Marx; Manuskripte über "Die Polnische Frage", 1863-1864, herausgegeben und eingeleitet von Werner Conze und Dieter Hertz-Eichenrode
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.2 (1966. 2) ,p.111(1)- 131(21)
JaLC DOI	10.14991/001.19660201-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660201-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

市村真一著『世界のなかの日本経済』……大山道広 104

山鹿誠次編『都市発展の理論』……高橋潤二郎 105

東畑精一 高橋泰蔵 監修 金融経済研究所編『明治前期の銀行制度 ―日本金融市場発達史Ⅰ―』……飯田裕康 106

大野英二著『ドイツ資本主義論』……常盤政治 107

C. M. マイヤー著 麻田四郎・山宮不二人訳『国際貿易と経済発展』……深海博明 108

宮本又次 合田巌作 著『経済変動の歴史的研究』……渡辺國廣 109

マルクス主義とポーランド問題

――マルクス「ポーランド問題にかんする手稿」(Karl Marx; Manuskripte über „Die Polnische Frage," 1863-1864, herausgegeben und eingeleitet von Werner Conze und Dieter Hertz-Eichenrode) を中心として――

飯田鼎

一、一九世紀初頭におけるポーランド問題
二、手稿の成立とその意義
三、手稿の内容

一

一九世紀初頭におけるポーランド問題は、ヨーロッパにおける民主主義運動と不可分の関係にあるといわれ、祖国の独立を目指す愛国者の闘争は、ヨーロッパのあらゆる自由主義・民主主義者の同情の的であった。マルクスとエンゲルスが、ポーランド問題について異常な関心を抱いたことは、一八四六年のクラカウの叛乱によって大きな衝撃をうけたことからして当然であって、やがて彼らは、ポーランド独立闘争をもって、万国博覧会およびアメリカ南北戦争とともに、第一インター

ナショナルの三つの契機のうちのもっとも重要なものとして把握するのであるが、しかし、一八四八年の共産党宣言の時期と一八六四年の国際労働者協会の創立宣言の時期との間に、その革命観に相違がみられると同様に、民族問題の理解についてもかなりの変化があったことは否定できない。マルクスの「ポーランド問題についての手稿」について、その内容を検討する前に、われわれはまずこの点についてふれておく必要がある。

ウィーン会議を契機とするロシア、オーストリアおよびプロイセンへのポーランドの分割後はじめて、一八三〇年一一月の終り、ウァルシャアにおける蜂起は、小邦分立の悲劇に悩むドイツのブルジョア民主主義運動に大きな影響をあたえ、また民族的統一と立憲的な自由の問題が解決されていないすべてのヨーロッパ諸国の亡命者の民族的革命的運動のなかで、ポーランド人は主要な役割を演じたのである。しかしながら、やがてヨーロッパにおける産業資本主義の発展のなかに必然的に発生せざるをえない民主主義的社会主義的運動と思想がその勢力を増大させるにつれて、従来、統一的にうけいれられていた革命的＝自由主義的思潮や目的が分裂の傾向をみせはじめた。とりわけ民族主義運動の国際性が強調されるにつれて、各国の民族運動は、そのそれぞれの民族的国民的目的において相互に矛盾するという結果におちいらざるをえなかったのである。それでも一八四八年以前においては、活動的なポーランドの民族主義的革命家や、あるいは他の諸国の自由主義者や民主主義者の場合でも、ポーランド問題にたいして、「われらの自由はまた諸君の自由」（„Für unsere und eure Freiheit“）という、共通の、従って連帯した立場をとりえたのであるが、一八四八年以後、一八六〇年代にかけては、新しい状勢の展開によってもはやこのような共通の地盤は失われてしまったのであった。

その新しい状勢の展開とは、具体的には何よりもまず、一八四八年以後、不徹底なブルジョア革命の反映としてのブルジョアジーと絶対主義勢力との妥協、その結果としてのボナパルティズムの支配＝ドイツ版ボナパルティズムとしてのビスマルクの支配が生まれ、似而非民主主義、封建反動の紛飾としての開明専制政策のなかで、ブルジョア階級は、その革命性を喪失していったことが指摘されなければならない。第二にイギリスやドイツの自由主義の革命性の喪失があげられねばならないが、とくにドイツの自由主義は、小ドイツ的な民族国家論に堕し、ビスマルクの政策に抵抗してまで、ポーランドとの友好を維持する力を失ってしまっていた。第三にポーランド内部の事情として、ポーランドの叛乱が主として農民の蜂起という性格をともなっていたため、その攻撃は、ロシア、プロイセンおよびオーストリアに向けられ、その三国を目標としていたにしても、封建的な大土地所有者との共同戦線において、この三大侵略勢力に対抗することに躊躇せしめる事情が存在していたのである。そればかりではない。一八四八年の革命以後、ヨーロッパの革命家たちの間に挫折感が深まり、ポーランドの解放は、ロシアにおける社会革命の問題と関連するものであり、ロシアの反動勢力が外からの圧力によって打倒されるのではなく、内部から革命がひきおこされねばならぬというような見解は、勢い、社会主義者の間にも日和見主義を醸成することとなったのである。(1)

以上のように、一八四八年以後、五〇年代から六〇年代にかけて、ヨーロッパの民主主義者や社会主義者の間には、革命的な観点からみて、ポーランド問題のしめる地位が相対的に下向しつつあったとき、マルクスとエンゲルスがこれを重視し、ヨーロッパ革命運動におけるもっとも重要な課題としてこの問題にとりくんだことは注目されなければならない。

一八六三年から六四年にかけて成立したとみられるマルクスのポーランド問題にかんする手稿は、いうまでもなくその成立を一八六三年の蜂起によっていると思われるのであるが、マルクスのポーランド解放についての思想の重要な手がかりともいうべきこの手稿の成立の背景はどのようなものであったろうか。筆者は、この手稿の編集者のひとりであるウェルナー・コンツェの紹介によってこの点を簡単に整理してみることにしよう。

コンツェによれば、一八四八年以前におけるマルクスのポーランド問題への関心は、最初は主として亡命者との接触を通じてであったといわれる。しかしその場合、一八三一年の蜂起に参加して失敗した指導者、ウィルナ大学の元教授の歴史家、

ヨアヒム・レレウェル（Joachim Lelewel）が、決定的に重要な役割を果したのであって、マルクスとエンゲルスは、一八四五年半ば以来彼を知り、一八四七年から四八年にかけて、密接な協力関係に入ったのである。[2] すなわち、マルクスとレレウェルとは、一八四七年、ブリュッセルに新しく建設された国際民主協会の執行部として知り合ったのであるが、この当時、ロンドンに本部をおいていた革命的な亡命者の国際的な組織、同胞民主協会が、一八三〇年のポーランド人民の蜂起を記念する記念集会を行なったとき、マルクスがはじめて公然とポーランド問題についての態度を明らかにしたのも、このレレウェルの影響があったものと思われる。なぜならばレレウェルは、ポーランドの復活を、かつての貴族支配の共和国に結びつけるものではなく、農民大衆を基盤とする〝人民の共和国〟に見出そうとしたのであり、そのための前提は、すべての人格的および地主的な隷属関係からの農民の解放であって、その目的を達する手段としては、大規模にして自然発生的な蜂起による以外に考えられなかったのであって、その意味では、彼の思想は、カルボナリ党の民主的団体のなかにおいて発展したような急進的な思想に照応するものであったといえよう。

このようなレレウェルの影響をうけながらも、マルクスとエンゲルスは、それとは別に、イギリスを中心とするヨーロッパのプロレタリア革命の勃発をポーランド解放の重要な条件として考慮しており、そこから当然に革命ヨーロッパの〝革命化されない〟反動ヨーロッパ（＝ロシア）にたいする戦争という構想が生まれてくるのであるが、この場合エンゲルスが、自由と独立を求める人民としてのポーランド人とドイツ人とを、ロシア、プロイセンおよびオーストリアにたいする民族的利益において共通の地盤に立つものとみなし、自由を求めて闘う民族の共同体という民主主義的思想（der allgemein demokratischen Gedanken von Gemeinschaft der um ihre Freiheit）の立場をとっていたことは重要である。すなわちそれはまず第一に、ドイツ人とポーランド人とは、やがて実現されるべき民族国家のための闘争において共同の地盤に立つこと、第二に、他民族の抑圧と犠牲の上に立つ民族的エゴイズムの拒否、そして第三にあらゆる傾向の革命家が議論するところの、歴史的発展の必然的権利という意味における社会経済的な革命の把握であった。[3] この場合、最後の観点がかなり重要な意味をもっていると考えられるであろう。なぜならば、エンゲルスのいう「歴史的発展」とは、ここでは明らかに民族運動と民族国家という視角から、西ヨーロッパと東ヨーロッパにおける状勢の差異にかなりの関心を払っていた点である。いうまでもなく西ヨーロッパ、とりわけイギリス、フランスおよびドイツと、東および南ヨーロッパとの相違は、前者が、大体において単一の民族から成る近代的国家であったのに反し、後者の場合には明らかに、ロシアの例に典型的にみられるように多民族国家であり、しかもツァーリズムは、このような「諸民族の牢獄」としての支配の維持のために、各民族の偏見を利用し、諸民族間の反目的感情を煽動し民族的結集＝近代的民族国家の創造を徹底的に弾圧したのであって、それはツァーリズムの同盟者としてのオーストリア＝ハンガリア帝国にしても、プロイセンにしても同様な政策をとっていたことは疑いえない。つまり簡単にいうならば、人種的ないしは民族的区別と政治的国境の一致という点で、東ヨーロッパと西ヨーロッパとでは明確な対照をなしているという歴史的な事情のもとで、西ヨーロッパにおけるプロレタリア革命と東ヨーロッパにおける民族主義革命（＝民族独立闘争）とをいかに結びつけるか、これが、マルクスとエンゲルスにとってもっとも重要且つ困難な課題として考えられていたのである。

その場合、マルクスとエンゲルスが、「国家間の敵対的な立場というものは、国家内部における諸階級の対立と一致する」という共産党宣言の思想を堅持し、民族自決の精神の上に立っていたことはいうまでもないが、しかしそれにもかかわらず民族解放闘争とプロレタリア革命との関連において、彼らが無制限な〝民族平等〟の思想に立っていたということはできない。[4] エンゲルスは、バクーニンが、その無政府主義からして、スラヴ人の自由な連合という思想を提案したのにたいして、民族の歴史的使命という構想をうち出していることにわれわれは注目しなければならない。[5]

すなわち彼は、ヘーゲルの影響によって、歴史におけるその政治的な生存権というものが明らかにするところの、必要不可

欠の偉大な民族を強調するのであって、このようないわゆる偉大な民族に属するものこそ、中部ヨーロッパにおいては、ドイツ人、イタリア人およびマジャール人であって、スラヴ人のなかでは、ポーランド人およびロシア人が、そうした歴史的な民族であり、精々のところセルビア人およびブルガリア人がその歴史的権利を許容されるにすぎないであろうというのである。[7] その他のスラヴ人は到底そのような歴史的任務に耐えられないのであって、チェック人、クロアチア人およびその他の類似のルンペン的・無頼の民族（„ähnliches Lumpen-gesindel", „Völker-abfälle"）は、歴史の上においてきわめてみじめな役割、いや反動的な役割をさえ演ずるにすぎないというのであって、エンゲルスは、実にこのような信念をその晩年に至るまで毫もかえるものではなかった。[8]

このように、エンゲルスは、バクーニンによって代表されるスラヴ主義が、革命の視点からみれば結局、歴史の歯軍を逆転させようとする反動的な試みであることを強調し、[9] スラヴ諸民族の自由な連合というものが、ツァーリズムの支配に奉仕する反革命的性質を有するものであるとしていることは注目に値する。なぜならば、エンゲルスがいみじくもまことに苛酷な表現で、「ルンペン的・無頼の民族」、「民族の断片」とよんだ弱小な多くのスラヴ系民族こそ、ひとたび戦争ともなれば、その八千万人はツァーリズムにたいして軍隊と財源を提供し、西欧民主主義諸国の敵としてたちあらわれるからである。これは弱小民族がもつひとつの宿命ともいえるものであり、反革命の側に容易に利用されるのに反して、ポーランド人こそは、その歴史的な民族的圧迫にたいする抵抗の経験からして、民族および民族性の政治的理論がもっともよく妥当すると考えられたのであった。

しかしこの場合、マルクスとエンゲルスは、一八四八年の革命後も、イギリスを起点とする新しい深刻な世界的恐慌を通じてはじめて大規模な革命を期待しうるものであり、ポーランドにおける独立闘争は、こうした世界革命の一環として理解されるべきであると考えていたのであるが、一八五〇年以後の、資本主義の相対的安定期の到来にともなう革命的諸条件の後退によって、ポーランドにたいする彼らの評価には、次第に変化があらわれはじめた。とりわけエンゲルスは、ポーランドがもはや農業革命、従って農民を民主主義の担い手として信頼することができなくなった。すなわちマルクスとエンゲルスの一八四七年から四八年の段階におけるポーランド解放の思想は、イギリスを中心とする先進国におけるプロレタリアートの解放を中核として構成され、またポーランド人の蜂起は先進国における革命への大きな刺激であるとされていたのに反し、いまやロシアにおける革命の必然性とこれとの関連においてポーランドの蜂起が問題とされるに至ったのである。それはどのような理由によるのであろうか。その理由のひとつは、ポーランド独立運動における理論的脆弱性とツァーリズム・ロシア内部における社会経済的矛盾、頻発する農民蜂起が、彼らに大きな衝撃をあたえたためであり、時あたかも中国において嵐のような勢いで農民の世界を席捲しつつあった太平天国の乱、その農民革命が、農民の要求に支えられて発展していたことに影響されたのではなかろうか。とくに、一八五三年当時、ポーランド民族運動の指導者マシュートとマッツィーニと結ぶアレキサンダト・ヘルツェンの社会主義、ロシアのミール共同体の歴史的な意義と農民社会主義とを結びつけようとする思想[10]のなかに、似而非社会主義を発見したマルクスとエンゲルスは、ポーランド独立運動が、これらの誤まった理論によって指導されることを拒否したのであって、ポーランド独立闘争は、ロシアの問題を離れて存在しえないことを確信するに至ったのである。

かくして一八五三年以後、ポーランド問題は、一時、ロシア農民の革命的蜂起の陰で、その重要性を失うかにみえた。とりわけエンゲルスが、プロシャ・ドイツの東部国境を確保することの必要性を訴えたのは、ポーランドにたいしてではなく、まさしくロシアにたいしてであり、[11] 民主主義に敵対する絶対主義の前衛としてのロシアが、やがてイギリスに挑戦することの危険性、同時にそれはドイツにおける民族国家の形成を危殆におとしいれるものであるとする危惧から発するものであった。興味深いことは、ロシアとイギリスとの関係において、マルクスはエンゲルスと異なり、その敵対的関係よりもむ

しろ抱合妥協の可能性を強く認めており、両者に若干の喰いちがいがあったにせよ、彼らが、一八五〇年代の半ばにおいて、ポーランド問題を、より深くより広く、歴史的・民族的な諸関係のもとに研究しはじめたこと[12]は注目に値する。

汎スラヴ主義者に反対なマルクスにたいして、フォークトは、マルクスが、ポーランド人もドイツ人同様、ロシアの膨張政策によって危険にさらされていると確信していると考えたのであったが[13]、マルクスは、汎スラヴ主義者のように、スラヴ人とドイツ人との対立という人種的対立に問題をすりかえるのではなく、ロシア帝国内部の矛盾の激化が革命とどういう関係にあり、その革命的諸条件の成熟がプロイセンやオーストリアのような専制的反動勢力にあたえる影響、とりわけドイツ統一とどのような関連をもつに至るか、この点に最大の注意を払ったのであって、そのような視角からするならば、一八六一年のロシアにおける農奴解放は重大な意義を有するものであった。

ロシアにおける農奴解放は、その矛盾の緩和あるいは解決を意味するものではなく、むしろその激化のあらわれであり、マルクスとエンゲルスは、この農奴解放こそロシア革命開始の合図とみたのである。このようなロシアにおける状勢の重大化にともなって、一時、重要性を失ったかにみえたポーランドが再び彼らの問題の焦点となったのである。そして、ポーランド人の間には、ポーランド、リトアニア、ルテニアの連合というスラヴ連合的ポーランド・リトアニア帝国――汎スラヴ主義の構想――という中央集権的傾向からの離脱という運動がたかまったのであるが、このような背景のもとで一八六三年ポーランドの蜂起がおこったことは、彼らに深甚な影響を与えずにはおかなかった。

彼らは、この蜂起について、最初は正確な判断を下すべき資料を欠いていたのであったが、いずれにしても彼らが、ポーランドの蜂起が、一方においてロシアにおける農民革命をひきおこし、他方においてプロイセンの崩壊を期待したことは事実である。マルクスにとってポーランドの存在は、あたかもビスマルクにとって一七七二年の国境の復活がプロイセンの脅威であったのとは正しく反対の意味において、統一ドイツのために不可欠であると考えたことこそ重要であって、ポーランドの独立、ロシア革命そしてドイツ統一は、相互に関連するものとして把握されていたのである。とくにマルクスにとっては、統一ドイツの達成の下でのみ、はじめて強力な社会主義的労働運動を期待できるのであり、プロレタリアートの運動の国際性は、民族国家の成立を前提にして、すなわち、独立の諸民族の間においてのみ可能でありうるものであった。その意味でもポーランド人は、国際的である前に何よりも民族的でなければならなかったのである。

(1) Karl Marx; Manuskripte über die polnische Frage(1863-1864), herausgegeben und eingeleitet von Werner Conze und Dieter Hertz-Eichenrode, Mouton & Co-1961, Einleitung, S. 8.

(2) Ebendort, S. 10.

(3) 「プロイセンとイギリスとロシアとは、ドイツ革命とその最初の成果であるドイツ統一とをだれよりもおそれざるをえない三列強である。というのは、プロイセンはそのために自己の存在を失うからであり、イギリスはそのためにドイツの市場を搾取できなくなるからであり、ロシアはロシアで、そのために民主主義がヴィスラ河ばかりかドヴィナ河やドニエプル河にまで進出するにちがいないからである……。

いまや、フランクフルトの決議からあるいは起こるかもしれない戦争は、プロイセンとイギリスとロシアとにたいするドイツの戦争となるであろう。そしてこのような戦争こそ、眠りこけようとするドイツの運動がまさに必要としているものなのだ。――これは反革命の三列強にたいする戦争である。またこれは、一七九二年から一八一五年までのドイツの反革命的な旧同盟国を敵とする戦争であり、『祖国を危機に』おとしいれるが、まさにそのことによって『祖国』を救済する戦争である。というのは、この戦争はドイツの勝利を民主主義の勝利にかかわらせるからである」（『新ライン新聞』一八四八年九月一〇日付、第九九号、「デンマーク＝プロイセンの休戦協定」、Marx/Engels, Werke, Bd. 5, SS. 393 ff. 邦訳第五巻三九四頁）。

(4) 「一国民の内部の階級対立がなくなれば、諸国民の間の敵対関係もなくなる」（「共産党宣言」、Werke, Bd. 479. 邦訳第四巻四九三頁）。

(5) E. H. Carr; Michael Bakunin, 1937. 大沢正道訳「バクーニン」（下）現代思潮社四六五―四六六頁。

(6) Einleitung, S. 18.

(7) エンゲルス「ドイツと汎スラヴ主義」（(M/E, Werke, Bd. 11, SS. 193 ff. 邦訳全集第一一巻一九〇頁以下）。

(8) エンゲルスは、一八八二年、ベルンシュタインにあてた手紙のなかで、汎スラヴ主義についてつぎのようにのべている。「われわ

れは、西ヨーロッパのプロレタリアートの解放に協力し、他のすべてをこの目的のために従属させなければならない。そしてバルカン在住スラヴ人その他がなおいかに興味あるものであっても、彼らの自己解放欲がプロレタリアートの利益と衝突するやいなや、彼らがどうなってもかまわない」（エンゲルス「汎スラヴ主義について」、一八八二年「エンゲルスからベルンシュタインへの手紙」）。

(9) 汎スラヴは、民族独立の運動だというだけにとどまらない。それは、一、〇〇〇年の歴史がつくりだしたものを、その起らぬ以前に返そうとつとめる運動であって、トルコ、ハンガリーおよびドイツの半分をヨーロッパの地図から抹殺することなしには実現できないものであり、また万一こういう成果を達成したとすれば、ヨーロッパを征服する以外に、その成果の存続を確保する手段をもたないのである。いまでは汎スラヴ主義は、一つの信条ではなくて、八〇万の兵を自由にする一つの政治綱領となった。それはヨーロッパを、スラヴ人によって征服されるか、それともスラヴ人の攻撃力の中心であるロシアを永久に打ち砕くか、二つに一つを選ばざるをえない立場においている（M/E, Werke, Bd. 11, S. 194. 邦訳一九二頁、但し傍点引用者）。

(10) ナロードニキについて、レーニンは「貧農に訴える」のなかでつぎのようにいう。「こういう友人たち（ナロードニキや社会革命党をさす……引用者）からは、たいした援助はえられないであろう。打ちやぶらなければならない最初の扉さえ諸君にははっきりわからないようでは、諸君がどれほどねがっていようと、それがなんになろうか？　都市だけでなく農村でも行われる。地主だけでなく共同体内部、ミール内部の金持をも敵とする、社会主義のための自由な人民闘争の道へ、どのようにすすんだらよいか、それが諸君にわからないようでは、諸君もまた社会主義を目ざしていようと、それがなんになろうか？（レーニン全集第六巻四三二―四三三頁）。

(11) エンゲルスは、一八五一年五月二三日のマルクスにあてた書簡のなかで、つぎのようにいっている。「結論をいえばつぎのようになる。つまり、西部ポーランドからできるだけ多くのものをとること、その要塞、とりわけポーゼンをドイツ人が占領すること、彼らを砲火のもとに追いやること、彼らの国を喰いつくすこと、リガとオデッサに期待をかけて彼らを養うこと、そしてもしロシア人が動きを開始しようとするのであれば彼らと同盟を結ぶことによって、ポーランドをして譲歩させること。もしポーランド人にたいして、メメルからクラカウまでの国境の線を一インチでも後退することをゆるすならば、これは軍事的見地から、すでにみじめなほど弱い国境を完全に破壊し去ることになるであろう。（Engels to Marx, Manchester, 23 May, 1851, Karl Marx and Friedrich Engels Correspondence, 1846-1895. A Selection with Commentary and Notes, 1934, London, p. 38.）

(12) 一八五六年一二月二日、マルクスは、エンゲルスにあて、つぎのようにいっている。「ポーランド史にかんするわたくしの最近の研究を基礎として、わたくしを決定的にポーランドに向わしめたものは、一七八九年以来のあらゆる革命の緊迫さと活力とは、それらのポーランドとの関係によって、かなりはっきりと評価されうる。ポーランドこそ、それらの外部的な〝晴雨計〟である。これは、われわれの短いドイツの革命的な時期においても明らかであり、ひとしくハンガリアの場合にもそうである（Marx to Engels, 2 December, 1856, ibid., p. 95）。またエンゲルスのこの問題にたいする態度については、Gustaw Meyer; Friedrich Engels, 1934, Bd. 2, S. 54 ff. を参照。

(13) マルクスのフォークト批判については、マルクス「フォークト君」、全集第一四巻四八〇頁以下参照。（M/E, Werke, Bd. 14, S. 490 ff.）

二

アムステルダムの国際社会研究所（Das Internationale Institut für Sozialgeschichte in Amsterdam）は、今まで印刷されたことのない一連の手稿を、カール・マルクスの遺稿という形で保存してきたが、ここにとりあげるポーランドにかんする手稿もそのひとつである。それは二つのグループから成っており、マルクスが一八六三年から一八六四年の間に、種々様々な動機から書いたものであり、両者とも、ポーランド問題を歴史的な観点から把えたものとして興味深い。ひとつは、「ポーランド、プロイセンおよびロシア」（„Polen, Preussen und Russland"）と名づけられており、「一八六三年記号 A 19 a―d」と書かれているし、いまひとつのものは題目はつけられていない。この編集者たちは「ポーランドとフランス」というタイトルと「一八六四年、記号 A 20 a―c」とでもしておくことが適当であるとしている。

この手稿はどういう意図のもとで書かれ、そしてどのような構成をもっているのだろうか。すでに指摘したように、一八五〇年初頭以後、マルクスとエンゲルスのポーランド問題への関心は一時中断された形であったが、それが一八六三年になって突如として復活したようにみえるのは、いうまでもなく一八六三年のポーランド人民の蜂起に刺激されたのであり、その当時のマルクスとエンゲルスの往復書簡にはその事情がよくうかがわれる。(1)

マルクスとエンゲルスは、ポーランドについての歴史的な考察を中心とするパンフレットを書こうと努力していたようで、エンゲルスは主として軍事的側面、すなわちポーランドの再生によって生ずるドイツの軍事的＝政治的利益についての

分析、マルクスは外交上の問題について書くことになっていた。まずポーランド問題についての声明書が最初に書かれ、つぎにくわしいパンフレットがつづくことになっており、それにはつぎのような内容が構想されていたのである。㈠ポーランド分割以前における西部および南部にたいするロシアの軍事的地位、㈡ポーランド分割以後の西部および南部にたいするロシアの軍事的地位、㈢ポーランドの独立恢復以後のロシアおよびドイツの立場。全容量二―四ボーゲンで、タイトルは、「ドイツとポーランド――一八六三年のポーランドの蜂起の場合における政治的軍事的考察」であった。

軍事＝政治的問題においてのエンゲルスの優越を高く評価していたマルクスは、このパンフレットにおける外交上の問題の分析と叙述を、たんなる補遺として考え、エンゲルスもまたそれを自分のメモに利用したり、手稿のなかにつけ加えようとしたのである。このようにしてエンゲルスは、準備をととのえたのであったが、しかし熱心にこの仕事にとりかかったとはいえない状態のもとで中絶してしまった。その理由について、編集者は、明らかにエンゲルスが、一八六三年の蜂起の失敗、その不幸な結末によって、その研究を書き下すのを控えてしまったのだといわれる。

これに反してマルクスはこの仕事にとりくみ、プロシャ＝ポーランドの歴史の研究に専心したのであって、彼の敵とみなすものはホーエンツォレルン家のプロイセンであり、プロイセン国家は、従来のロシアなくしては存立することができないし、独立のポーランドの成立は、プロイセンの存在を危くすると考えていたのである。マルクスはこのような視点のもとに、手稿の作成にとりかかったのであって、一八六三年二月の末から一八六三年の五月までその作成とポーランドにかんするパンフレットの書き下しにかかったのであったが、肝臓病のために不可能とされたのであった。といってもマルクスがポーランド問題についての関心を失ってしまったわけではなく、一八六三年の秋にあらわれたロンドンのドイツ労働者協会の声明[2]についてみれば、これは明らかにマルクスによって起草されたものであり、翌年の一八六四年の終り頃には、ポーランド問題を再びとりあげたのであった。

そこでわれわれは、プロイセンおよびロシアのポーランドにたいする関係についてはあまりふれないで、むしろフランスについてふれている第二のグループの手稿に出会うのであるが、この手稿を生み出した直接の動機は、この年の秋に開かれた国際労働者協会の中央委員会において行われたポーランド問題についての議論から発しているといわれる。すなわち一八六四年一二月一三日の中央委員会において、ピーター・フォックス（Peter Fox）がフランスのポーランドにたいする外交政策は、伝統的に友好的であったとしているのにたいし、マルクスは、歴史的な事実をあげて反論していることが記録されている[4]が、このような一八世紀および一九世紀におけるフランス・ポーランド関係の歴史的事実こそ、第二のグループの手稿と密接な関係があった。編集者によれば、第二のマニュスクリプト A 20 b は、その裏に、第一インターナショナルの開会宣言の草稿が記されているところから、それが、大会の開かれる直前、一八六四年の九月二一日から二七日に書かれたのであるとすれば、この第二の手稿は、少くとも十月末日以前に書かれることはないというのである。[5] さまざまな状況から判断して、ポーランド問題にかんするマルクスの第二の手稿の作成の時期は、一八六四年一二月頃とみることができる。しかしその基礎となる抜萃の作成は、それより少し前にさかのぼるのではないかとみられる。なぜならばマルクスは、すでに早くから一八世紀のポーランド分割やナポレオン時代の歴史について読んでいたとみられる証拠があるからである。[6] 手稿の基礎となる抜萃について、編者のいうところをきいてみよう。

この抜萃は、三つの部分から成っており、マニュスクリプトの作成にとってマルクスによって利用された文献の配列という点からみてもさまざまの意義をもっており、手稿に引用された個所は鉛筆でアンダーラインされており、またアンダーラインで記されていないところでも手稿に引用されていることもあったが、これは稀で例外的な現象であったといわれる。この抜萃の内容は、大体において引用文から成っており、その終りの方に、年代的には整理されていないけれども、一六四〇年から一八〇七年までの時代の歴史的な事実が三頁ほど記載されている。これは、ティルジットの平和に至るまでの時の政

府、ブランデンブルク＝プロイセンの支配者、重要な戦争、会戦および平和条約を内容としており、従ってそれによって、プロイセンの歴史や一七世紀および一八世紀の外交問題におけるプロイセンの行動が前面にでているのである。この資料の蒐集をマルクスは、「ポーランド、プロイセンおよびロシア」というテーマのための補助的な手段として利用したいと考えられる。それでは実際にこの手稿はどのような内容から成っているのであろうか。

（1）一八六三年二月一三日、マルクスはエンゲルスにあてた書簡のなかでつぎのように書いている。「君は、ポーランド問題にたいして、どういう意見をもっているか？　これだけはたしかだ。つまり革命の時代が、ヨーロッパにおいて再びいまや開かれたということだ。そして全般的な状態はよい。しかし、われわれが、一八四八年二月以前革命の時代を歓呼して迎えた愉快な錯覚や、ほとんど子供らしい熱狂というものは、みな地獄へ行ってしまった。」(Correspondence, ibid., p. 144.)

（2）インターナショナルの活動において、「在ロンドン・ドイツ労働者教育協会の檄」は注目される。その冒頭につぎのようにいう。「在ロンドン・ドイツ人労働者教育協会は、ポーランド国民政府代表者の同意をえて、イギリス、ドイツ、スイスおよび合衆国に在住するドイツ人労働者の間で、ポーランドのための募金を組織する全権を、下記の委員会にゆだねた。たとえ、これによって、わずかな物質的援助しかポーランド人にあたえられないこともあろうが、しかもなおこのことは、彼らにたいする大きな精神的援助となるであろう。

ポーランド問題は、ドイツ問題である。独立したポーランドがなければ、独立と統一のドイツはなく、ポーランドの第一次分割いらいはじまったロシアの支配からの、ドイツの解放はない……」(Werke, Bd. 15, S. 576. 邦訳全集第一五巻五四九頁)。

（3）中央委員会記録には、つぎのように書かれている。「フォックス氏は、フランスの伝統的な対外政策は、ポーランドの復活と独立にたいして友好的であったという陳述を擁護する回答を行った。」(General Council of the First International 1864-1866, the London Conference 1865, Minutes, p. 56.)

（4）つぎのように記録されている。「……マルクス博士は、ポーランドの国民政府に送られるよう提案されている呼びかけについての議論をひきつづき再開した。そしてあらゆる可能な歴史的な要約のなかでつぎのように論じた。すなわち、フランスの伝統的な対外政策は、ポーランドの復活と独立にとって友好的でなかったというのである。マルクス博士の演説は、印刷された形としては非常に貴重であると思われる重要な歴史的事実を示唆するものであった。

フォックス氏は、これに答えて、自分は、現代フランスの対外政策を擁護するものではないとのべた。彼が主張したところはすべて、かつてのフランスの対外政策が、ポーランドの独立にたいして好都合なものであったということである。つぎのようなことが、ユング氏によって提案され、ル・ルュベが賛成して万場一致で採択された。すなわち、ポーランドにたいするフランスの対外政策にかんする演説のなかにあらわれた諸見解は、歴史的事実によって確認されたものではなく、従って、それは、歴史の事実にてらして修正されるべきものであること。」(Minutes, ibid., pp. 61-62.)

（5）この経緯については、Marx to Engels, [London], 4 November, 1864. (Marx and Engels, Correspondence, 1846-1895, pp. 159 ff.)

（6）Einleitung, S. 50.

三

手稿（A 19 a）は、一二頁をしめており、大選挙侯の時期から一七九三年のポーランド第二次分割の前夜までを含んでいる。この時期の評価におけるマルクスの基本的な考え方はおよそつぎのようである。㈠スウェーデン、ポーランドなどの近隣諸国への絶えざる裏切りを通じての、ロシアにたいする奴隷的な従属を通じてのプロイセンの興隆、㈡プロイセン、スウェーデンおよびポーランドの絶滅を条件としてのロシアとの同盟、ホーエンツォレルン家＝フリードリッヒ二世大王の一七七二年のポーランド分割に際しての背信行為。(A 19 a, 1 f) には、つぎのように記されている。

「ポーランドの再生は、現在のロシアの破壊〈破壊／後退〉、〈ロシアの破壊／ロシアの破壊〉、世界支配の候補者〈としての役割〉からのロシアの後退である。(1) (Die Wiederherstellung Polens ist die〈Vernichtung/Absetzung〉Vernichtung des jetzigen Russlands, die Vernichtung Russlands/die Vernichtung des Russlands〈die Absetzung Russlands von seiner Rolle als〉Kanditatur zur Weltherrschaft.

もとより手稿であるから、表現において決定的な断定をさけ、〈絶滅／後退〉(die〈Vernichtung/Absetzung〉)というような選

択の余地を残したのだと考えられるが、それにしても、〈ロシアの絶滅／ロシアの絶滅〉（die Vernichtung Russlands/die Vernichtung des Russlands）とあるのはどう理解すべきであろうか。間違いであろうか、それとも絶滅を強調したのであろうか。つづけてつぎのようにいう。

〈ポーランドの再生がもし実現されるならば、それはモスクワ人のタタール的な桎梏からのドイツの解放、ドイツの自由であろう……〉。ポーランドの絶滅、そのロシアへの最後的な同化は、ドイツの絶滅であり、その衰亡である。そのスラヴ的要素の唯一の堤防の崩壊〈合流／崩壊／陥没〉との結びつき、その堤防によってこそ、スラヴ的な世界支配と〈スラヴ的要素〉および、スラヴ人の〈合流〉影響、他方において、スラヴ人の洪水の前に、〈世界の大海／合流／スラヴ人の洪水〉からドイツを〈防衛〉したのだ。(2)

ここにはまさしく、スラヴ人にたいするマルクスの恐怖に近いほどの警戒をみることができる。それは皮肉な見方をすれば、ユダヤ人、被圧迫民族出身としてのマルクスのスラヴ人にたいする嫌悪ともとれるであろうが、しかし事実は、封建的細分状態のなかで、ドイツ統一の障害となりつつあるプロイセンのホーエンツォレルン家のロシアの屈従政策への憎しみの表現であり、ドイツにおける分裂状態の維持のもとでのポーランドの分割は、スラヴ人のポーランドへの浸透、やがてドイツ東部の支配をもたらすことを憂えたのであり、この意味では一九世紀末のマックス・ウェーバーを想い起させるものがある。しかしマルクスはツァーリズムの支配、従ってまた反動的なプロイセン絶対主義の支配にとってまことに好都合な民族的な偏見の助長――とりわけスラヴ人とポーランド人との間の――をおそれたのである。マルクスはあくまでもプロイセンとドイツを区別していたことが重要である。すなわちつぎのようにいう。

〈もしドイツがひとつの国となるときがあるならば〉、ドイツにとって、〈その〉対外政策のあらゆる問題は、〈ひとつの〉問題に集約されるであろう。それはポーランドの再興である。〈これは本能的なものであった／一八四八年のドイツ人民は、一八四八年のベルリンで〉、〈ベルリン〉のバリケードでこの合言葉を叫び、〈こだました〉。しかしドイツはプロイセンではない、そしてプロイセンはドイツではない。

また（A 19a, 2）にはつぎのように記されている。

〈フリードリッヒ一世、いわゆる大選挙侯の息子〉

〈国王――／最初の第一歩、プロイセン王国〉

〈フリードリッヒ一世／プロイセン王国の最初の数十年間の年月――この称号は、はじめて一七〇〇年からはじまる〉

〈プロイセン国家／ブランデンブルク〉ホーエンツォレルン家の発展における最近の進歩は、変化である／専有から出発する／プロイセンにおける変化による／それは商標の贋造／変更である／に存する……。(3)

（A 19a, 2）にはつぎのような文句がみられる。

「一七〇〇年から始まるプロイセン王朝の子供時代は、ペーター大帝の時代〈とともに〉近代ロシアの子供時代とかち合う。彼は、西ヨーロッパがフランスのルイ一四世にたいして闘争しているときに、フランスの世界的な王朝の幻影が闘う〈遂行する〉ところの闘争を利用する」。(4)

〈以下のことが、間もなく確信された。彼の傷のことだ〉、スウェーデンの獅子、〈カール七世〉が〈まだ〉生命の徴候が明らかである〈現われている〉限り、破りがたい友情があるようにみせかける。間もなく、その傷が致命であることを確信するようになると、それは、そのスウェーデン＝ポンメルンの所有地の大部分、すなわちゼッティンとオーデル河口の島嶼を、モスクワ人〈無敵のペーター大帝〉の手から奪取〈しようとする〉〈古きホーエンツォレルン家の夢が実現されるのだ〉しかもこの場合には、カール七世とはもっとも親密な平和な関係にあり、そして〈それによって〉彼の領土の防衛を義務づけられた〈ている〉のだ。

〈掠奪品の分け前への参加〉スウェーデン帝国の分割は、〈ロシアのジャッカルとしての／最後の一歩／主要な国家活動であった〉ヨーロッパの舞台において、ロシアのジャッカルとしてのプロイセン王国を著名にしたところの最初の主要な国家活動であった[5]」。

つづいて（A 19 g, 3）にはつぎのように記されていることは注目に値する。

「ブランデンブルク選挙侯国にとって、いわゆる大選挙侯が最初であった〈ところのものは〉ように、フリードリッヒ三世は、〈王国に昇格しつつあったプロイセンにとって――ホーエンツォレルン家の／ホーエンツォレルンの第二の創立者〉ブランデンブルク＝プロイセン国家の第二の創立者である……。〈敵対国家オーストリアにたいするプロイセンの昇格／彼がプロイセンをつくる／二〇年以上もの長い間、オーストリア、ドイツ帝国およびヨーロッパ連合軍と闘っている間に――シュレージェン！　その闘争から、ドイツの自尊心が発展したとすれば、それは〈彼の〉目的にそうものではなかった――なぜならば、最も高貴な王家、ホーエンツォレルン王家のために、強奪者は新しい領土の独占的な奪取を準備する／それは独占的に帝国内部のひとつの州の〈略奪〉奪取にむけられ、そして〈ホーエンツォレルン家〉の肥大、ホーエンツォレルン家の私的権力の拡大にむけられるのだ〉。そうしている間に、七年戦争の闘争の終りになって、彼の救助策がみつかり、しかもその最後の同盟者イングランドは、敵対的な状態に移行した。〈彼は危機に立った／彼にロシアが恩恵をほどこしたところのもの〉。没落〈の前に〉から〈そしてその選挙侯／ブランデンブルク辺境伯への格下げから彼を救ったところのもの、それこそロシアの恩寵であった〈そのロシアにおいては、フリードリッヒの讃美者でドイツの君主、ペーター三世が支配していた〉。……ハップスブルグ家の平和が、プロイセン王朝の新しい基礎をつくり、ロシアの恩寵が、ハップスブルグ家の平和を形づくるのである以上、プロイセンは、事実上、ロシアの恩寵の王国にすぎなかった」。ロシアの恩寵であった〈そのロシアにおいては、フリードリッヒの讃美者でドイツの君主、ペーター三世が支配していた[6]〉。

フリードリッヒ二世の時代におけるプロイセンの地位、そのロシアにたいする従属関係を、手稿は以上のように記録しているが、さらにその矛盾をつぎのように描いている。

「ハップスブルグ家の平和から、プロイセンは、オーストリアにたいする〈ドイツの〉反対国家として浮び上ってきて、しかもヨーロッパ的な名前を獲得した……。東プロイセン、ブランデンブルク、シュレジェン、ライン河畔の若干の領地は、〈ひとつの〉ヨーロッパの請求権、オーストリアとの競争の〈続行／実行〉貫徹のための嘲笑すべき物質的基礎であった。〈フリードリッヒ二世は、みずからヨーロッパの〈敵としての〉敵となるための名誉をえた〉。フリードリッヒ二世はまた、第三の対外的な力への依存を必要とした。具合悪くも〈悪い〉支えとなる傾向にあるフランスの没落を別とすれば、フリードリッヒ二世は、シュレジェン戦争中に、二度にわたる契約破棄によって、フランスを〈シュレジェン的〉オーストリアの状態におとしていた。〈そのために〉そこではフランス革命の勃発まで、同じ状態にとどまっていたのである。フリードリッヒを〈とともに〉嫉妬するハノーヴァ辺境伯を支配するイギリスは、七年戦争の終りにあたって彼を裏切ったのみならず、ペテルスブルクやウィーンにおいて、プロイセンの分割のための提議をした。ロシアもまた、事実、その〝命取り〟であった。その結果彼は、ドイツ諸侯、〈オランダ〉、スウェーデン、トルコおよびポーランドとの同盟にその活路を見出さなければならなかった。その重点が、ポーランドで〈なければならなかった〉あるはずのこのような同盟は、ホーエンツォレルン〈家〉の権力の維持のために〈必要不可欠となった〉必要とされたところの〈その領土／家の権力の〉拡大のための唯一の見込を、まさに彼にたいして閉じた〈拒んだ〉のである。帝国における新しい儲け――フリードリッヒ二世はつぎのようなことを知った。すなわち彼は二度もその冒険に耐ええ〈ることができ〉ない……[7]」。

以上のように、マルクスのポーランド問題についての視角は、プロイセン絶対主義の確立者たるフリードリッヒ二世の政策――ロシアにたいする屈従政策と近隣弱小民族にたいする恫喝と支配ドイツの民族的統一にたいする妨害、とくにポーラ

ンドにたいする領土的野心にむけ、ドイツ民族の利益を犠牲としてのホーエンツォレルン家の栄光を求める戦争と冒険の政策に焦点をあてていることが注目される。（A 19 a, 8）にはつぎのように書かれている。

「その生涯のたそがれに、フリードリッヒ大王は、〈ロシアへの彼の忠勤の成果〉ロシアの保護とはきり離すべからざる甘さを味わった。彼は、自分の家の権力のために、オーストリアと対立してまで、全ドイツの利益をロシアにいけにえとして捧げたのだ……」。(8)

筆者は以上において簡単ではあるが、マルクスのポーランド問題にかんする手稿において、一八六四年第一インターナショナル直前における彼の民族解放思想がどのような歴史的基盤の上で成立したものであるかを明らかにしたつもりである。この手稿自体あくまでも草稿であり、従ってそこには不確実な表現や、同一の事実のくり返しがみられるのであるが、それにもかかわらず、この手稿は、つぎのような意味から、マルクスとエンゲルスの民族解放思想にとって決定的に重要である。

なぜならば、すでにみたように、一八四七―八年の時点での彼らの革命観は、先進国イギリスにおける階級闘争の役割への過大な評価に依拠しており、ポーランドの解放もその発展に依存するものであるという基本的観点に立っていた。もちろんこの時期においても、ロシアおよびプロイセン政府の反動的性格が強く指摘されてはいたが、とくに第一インターナショナルの直前に書かれたとみられるこの手稿では、この点は克服され、ポーランドの解放は、ドイツの統一と不可分のものとして考えられ、ツァーリズム・ロシア、プロイセン＝ホーエンツォレルン家およびオーストリア＝ハップスブルグ家の打倒こそプロレタリアートにとって緊急の課題であり、そのためにこそポーランドの再興の必要性が強く訴えられているのである。かくして、マルクスは、イギリスにおける社会主義革命ではなく、ロシア革命の問題が、彼らの革命思想のなかに重要な地位をしめつつあることを意識しなければならなかったのである。

(1) Ibid., Karl Marx; Manuskripte über die Polnische Frage (1863-1864), S. 93.
(2) Ebenda, S. 93.
(3) Ebenda, S. 97.
(4) Ebenda, S. 98.
(5) Ebenda, S. 99.
(6) Ebenda, S. 103.
(7) Ebenda, S. 105.
(8) Ebenda, S. 119.